

◇ 行政視察報告書 ◇

〈提出者氏名〉 木戸 徳吉

委員会名	産業建設常任委員会	
委員名	[委員長] 木戸 徳吉	[副委員長] 塩貝 孝之
	[委員] 村山 好明	[委員] 八木 信樹
	[委員] 小中 昭	[委員] 谷尻 宣雄
	[委員]	[委員]
視察先	島根県美郷町	広島県庄原市
視察日	令和4年8月17日(水)	令和4年8月18日(木)
視察時間	午後2時30分～午後4時00分	午前10時00分～午前11時30分
調査事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害被害対策の取り組みについて ・ 青空クラフトの活動について(現地視察) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 庄原DMOの取り組みについて
行政視察を終えて	<p>◇獣害被害対策の取り組みについて</p> <p>美郷町は、島根県の中央に位置し、本市の日吉町や美山町に似た地域で、農地の近くに山が迫り、農業を営んでいく上で特にイノシシ等の獣害に悩んでいるのが、実感された。人口4,300人ほどで、いわゆる高齢化も進み担い手の確保も大変であると感じた。その中農家自ら、狩猟免許を習得し活動をされており、人頼みではなく自分の農地は自分で守る意気込みを感じた。また、電気柵を使用するのに軽量で設置が簡単な製品開発を行政、企業、法人と連携して行い、特許申請まで至ったことは真剣に取り組まれた成果であると思うと共に、この姿勢は本市も見習うべきことではないかと強く思った。</p> <p>◇青空クラフトの活動について</p> <p>厄介者のイノシシを捕獲し、肉は食用に残った皮を業者になめしてもらい、加工して販売をされている。いただいた命をあますところなく利用される取り組みは価値あるものと理解する。作業が高齢者の交流の場となり、収入の一つとなることは、参加者の生きがいになっており、参考になった。</p>	<p>◇庄原DMOの取り組みについて</p> <p>庄原市は本市とほとんど時期を同じくして合併されており、人口も33,000人弱で似通っている。面積においては1,246平方キロメートルと倍以上ある。広大な面積で維持管理が大変であろうと即思った。</p> <p>1市6町が合併されており、市に観光協会各旧町にそれぞれ観光協会支部がありその組織をまとめていくにはご苦労があるのではないかと推察する。1つの組織、司令塔としてのDMOの情報の発信や、イベント支援に取り組んでおられるが、まだ道半ばとの思いを持ったことも事実である。どの市町においても、観光の魅力の発信や発掘が大きな役割を果たすので、今後の取り組みを注視していきたい。一つ素直に思ったことは事務局の人員が11名とあり人員が多い印象を受けた。</p> <p>本市もDMOの組織があるが、地域の稼ぐ力を引き出し、観光の司令塔となり、地域経済を持続的に成長させる新しいタイプの取り組みであり、今後試行錯誤しているんなことを行い、実りある成果が生み出されることを期待したい。</p>

◇ 行政視察報告書 ◇

《提出者氏名》 塩貝 孝之

委員会名	産業建設常任委員会	
委員名	[委員長] 木戸 徳吉	[副委員長] 塩貝 孝之
	[委員] 村山 好明	[委員] 八木 信樹
	[委員] 小中 昭	[委員] 谷尻 宣雄
	[委員]	[委員]
視察先	島根県美郷町	広島県庄原市
視察日	令和4年8月17日(水)	令和4年8月18日(木)
視察時間	午後2時30分～午後4時00分	午前10時00分～午前11時30分
調査事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害被害対策の取り組みについて ・ 青空クラフトの活動について(現地視察) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 庄原DMOの取り組みについて
行政視察を終えて	<p>美郷町では2019年から、鳥獣被害対策版シリコンバレー「美郷バレー」構想として、取り組みを始められ、2020年には、捕獲体制の再構築として猟友会と切り離れた農家主体の捕獲体制に再編されてきました。その後も夏イノシシの資源利活用や大学・企業との連携をはかり、多くのTV取材や視察受け入れなど、全国でも有数の獣害対策に成功している町として注目を集めています。また、駆除をして終わるのではなく、食材や革製品に加工し、資源を利活用する部分にも注力されていました。</p> <p>美郷町での対策事例はイノシシによる獣害がメインで、本市のようにイノシシ・サル・シカなど多様な防除が必要な状況とは違う部分はありますが、生産者自ら田畑を守り、持続可能な農村を目指すという点においては、見習うべき部分が大いにありました。</p> <p>以下本市においても取り組みを参考にすべきと感じた点を記します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域一丸となった防除体制の構築 (本市でも各地域で取り組みは進めてきておりますが、駆除の前に、まず守るという事に注力が必要) ・ 狩猟と駆除の明確な線引き (生産者で防除をし、猟友会で効果的な駆 	<p>庄原市は、1市6町の合併により、南丹市の倍の面積1246.49km²と広大な面積に約33,000人の人口という町です。</p> <p>DMO(観光地域づくり法人)の視察にうかがったわけですが、本市の観光施策とはまったく違う歩みを進めておられると感じました。</p> <p>庄原市では合併を機に1つの観光協会として発足し、2020年にDMOとして組織を改組されております。本市においては、美山DMO、八木町観光協会、日吉町観光協会、るり溪観光協会と混在し、昨年には園部町文化観光協会が立ち上げられました。観光に来られる方には旧町の線引きはありません。さらなる連携の強化を模索し、目指すは1つの観光協会(DMO)であると再認識しました。目に見えて感じたのは観光案内パンフレットです。庄原市では1冊に見やすくまとめられ旧町の境界線はありません。しかし、本市では多種多様な観光案内が発行されており、市としての戦略は見えにくいものになっていると感じます。</p> <p>人口減少による財政規模の先細りは、観光戦略にも影響をあたえるでしょう。今こそ、ひとつの南丹市として効果的な「稼ぎ」を得られる政策へと転換しなければならないと感じ</p>

除を実施)

- 捕獲獣の有効活用
(獣肉のブランド化や安定した供給体制の構築)
- 学生や民間など多様な人材交流をはかる

じました。

◇ 行政視察報告書 ◇

〈提出者氏名〉 村山 好明

委員会名	産業建設常任委員会	
委員名	[委員長] 木戸 徳吉	[副委員長] 塩貝 孝之
	[委員] 村山 好明	[委員] 八木 信樹
	[委員] 小中 昭	[委員] 谷尻 宣雄
	[委員]	[委員]
視察先	島根県美郷町	広島県庄原市
視察日	令和4年8月17日(水)	令和4年8月18日(木)
視察時間	午後2時30分～午後4時00分	午前10時00分～午前11時30分
調査事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害被害対策の取り組みについて ・ 青空クラフトの活動について(現地視察) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 庄原 DMO の取り組みについて
行政視察を終えて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害対策について 中国山地に位置する島根県美郷町は、長年イノシシ被害が多く発生している。田畑を荒らすイノシシを、長い時間をかけ、住民の自治による獣害対策を確立され、現在では、単なる獣害対策の域を超えて、食肉のブランド化、皮革製品の製造などの展開をされ、さらに、雇用や定住促進を生み出されている。 令和元年より、産業振興課が担当していた関連事業を独立、「山くじらブランド推進課」を設けられ、獣害を逆手に取った取り組みの強化、大学や民間企業との連携、町外からの人と技術を呼び込むブランド化等が図られた。さらに、鳥獣害対策部品メーカーの中国営業所の設置、NPO との連携や津市、丹波篠山市とも、獣害対策をきっかけに、ノウハウや技術の共有があり、山くじら(イノシシ)だけにとどまらない産官学民の共同体を形成されている。また、美郷町は、鳥獣害についての最新の情報や人脈が得られる場所になればと言う思いから、「美郷バレー課」と名称変更され活動されている。 ・ 青空クラフトの活動について(現地視察) イノシシ(やまくじら)の皮を地元女性会の方がクラフト加工され、販売されているので、現地視察を行いました。まず、紙芝居(お 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 庄原 DMO の取り組みについて 庄原市では、公平性の原則(マーケティングに基づくプロモーションがやりにくい)・定期異動による専門性やネットワークが育ちにくい・顧客志向になりにくい(意思決定が現場から離れている)等の行政での限界があるとした観点から、DMO の取り組みが始まった。 目的としては、 <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の稼ぐ力を引き出す ・ 地域への誇りと愛着を醸造する観光地域づくりの司令塔 ・ 地域が稼げる仕組みづくりで、地域経済を持続的に成長させる。 以上のことを目的とし、官民連携形成・確立をされ、行政・民の強みを活かされている。 庄原 DMO の事業サイクル(地域が稼ぐ PDCA)が下記のように構築されている。 <ul style="list-style-type: none"> ・ P:エリア戦略を決めて、地域で合意する。 ・ D:地域発の「新しい価値創造(商品開発)」を行う。 ・ C:消費を上げる「稼ぐ受入環境」を整備する。 ・ D:地域と消費者を「マッチング(流通・販路・PR)」する。 ・ C/A:「検証」を行い、次回への「改善点」

おち山くじら物語)を、女性会の会員さんが行われ、安田会長より、紙芝居をやることの意義、イノシシの革製品の開発等についてお話をいただきました。女性会の会員さんが生き生きと活動されていたのが印象に残りました。

美郷町を視察して感じたことは、各事業(獣害対策・観光・地域振興・産業等)が連携し、生き生きした活動をされていることが、最大の強みと感じました。本市においても、参考にすべきと考えます。

を得る。

基盤持続・自走するための「人づくり、組織づくり」を地域資源の観光的価値を貨幣価値に変換する。

庄原市の取り組みで、観光事業や販売促進を中心に地域と一体となる取り組みをされています。本市においても、参考とすべきと考えます。

◇ 行政視察報告書 ◇

〈提出者氏名〉 八木 信樹

委員会名	産業建設常任委員会	
委員名	[委員長] 木戸 徳吉	[副委員長] 塩貝 孝之
	[委員] 村山 好明	[委員] 八木 信樹
	[委員] 小中 昭	[委員] 谷尻 宣雄
	[委員]	[委員]
視察先	島根県美郷町	広島県庄原市
視察日	令和4年8月17日(水)	令和4年8月18日(木)
視察時間	午後2時30分～午後4時00分	午前10時00分～午前11時30分
調査事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害被害対策の取り組みについて ・ 青空クラフトの活動について(現地視察) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 庄原DMOの取り組みについて
行政視察を終えて	<p>美郷町は、人口約4,900人の山あいの町で、高齢化率も45%以上と過疎化と高齢化が深刻な町であるが、産官学民が連携して猪(山くじら)の獣害問題に取り組みながら、社会課題の解決と持続可能で明るい未来社会を作っていく為の共創に取り組まれている。</p> <p>特に、獣害被害対策では、1995年猪による農作物被害の増加に悩まされてきたことから農研機構西日本農業研究センターの指導の下、動物の特性を考慮した柵の取り付け方などを学び対策を実施。捕獲した猪の確認も2000年4月から役場職員による現地確認も開始されている。</p> <p>また、おおち山くじら生産組合設立に先立ち、有害鳥獣の駆除登録に、猟友会だけでなく農家も自らが立ち上がって参加。駆除活動も猟友会に一任せず、農家自らが狩猟免許を取得することで、被害対策と狩猟の線引きによる住民主体の対策が実現されている。</p> <p>捕獲した猪は、おおち山くじら生産組合が回収するため、捕獲する側も処分負担が少なく済み、捕獲の担い手不足の解消にもつながっている。</p> <p>2018年11月に美郷町長による産官学民が集う鳥獣被害対策版シリコンバレー、通称「美郷バレー」構想によるNPO、大学など5</p>	<p>庄原市は、平成17年3月に近隣の1市6町が新設合併し、一つの市として誕生したことにより、全国自治体の中で13番目の広大な(1,246.49km²)土地を持つ市となっている。</p> <p>そうした中、各地域の観光地を活性化させ、地域全体を一体的にマネジメントしていくため令和2年4月に一般社団法人庄原市観光協会を改組し、庄原DMOが設立されました。</p> <p>庄原DMOの活動としては、民間・行政が一体となって、庄原ブランドの形成に向けた観光地域づくりとして戦略的に取り組み、庄原における観光関連産業の振興、および観光消費額の向上による地域経済の活性化を促進し、豊かな地域社会の実現を図る事を目的として行政と観光事業者等の中間支援組織として活動されている。</p> <p>稼ぐ観光地域づくりの舵取りとしてマーケティングに基づく「魅力ある観光プロダクト」を開発・プロモーション動画作成や庄原ブランドの確立、さらに観光交流を切り口に関係人口や定住人口の拡大や観光消費額を向上させ、地域経済を活性化させるなどのミッションを持ち活動されている。</p> <p>近年では、新型コロナウイルス感染症による影響により団体旅行客の減少や旅行スタイルの変化</p>

団体による鳥獣被害対策や地域資源活用に取り組む里地里山問題研究所と対策に関する包括連携協定が結ばれ、互いのノウハウを共有し、活動を展開。また、市民のニーズに対し、大学側が猪の行動学を分析して企業側に提案。企業側は、電柵などの型を取り販売するなど美郷町生まれのテザック電柵部材（テザックポール）も完成している。捕獲した猪の活用では、企業や住民が加工して、缶詰めや革製品などの特産品の開発作りにも取り組まれている。

現地視察では、青空サロングループ（吾郷地域婦人会）内の青空クラフトを訪問しました。活動されているメンバーは、猪の皮を地域で活用したいという思いから、おおち山くじら生産者組合の猪革を仕入れ、デザイン・裁断・縫製まで、すべて手作業で製造して販売する住民活動の演劇を見学する事ができました。美郷町の産官学民が協力した獣害対策と山くじらを活用した製品作りなどの美郷バレーも勉強することができました。

などに対応すべく、名所より地域交流に価値を見出す事が考えられ、これまでの団体旅行による、いいとこどり周遊旅行から個人旅行の滞在交流型への新たな視点での観光地域づくりを推進するなど、受け入れ側の観光地も変わっていく必要があるとの認識から商品造成や観光資源の再発見、体験や営みにふれる観光旅行に取り組まれていました。

◇ 行政視察報告書 ◇

〈提出者氏名〉 小中 昭

委員会名	産業建設常任委員会	
委員名	[委員長] 木戸 徳吉	[副委員長] 塩貝 孝之
	[委員] 村山 好明	[委員] 八木 信樹
	[委員] 小中 昭	[委員] 谷尻 宣雄
	[委員]	[委員]
視察先	島根県美郷町	広島県庄原市
視察日	令和4年8月17日(水)	令和4年8月18日(木)
視察時間	午後2時30分～午後4時00分	午前10時00分～午前11時30分
調査事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害被害対策の取り組みについて ・ 青空クラフトの活動について(現地視察) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 庄原DMOの取り組みについて
行政視察を終えて	<p>* 獣害被害対策の取り組みについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害から派生して、地域ブランドの確立がなされた(おおち山くじら) <p>行政では「山くじらブランド推進課」が本年4月から「美郷バレー課」となった。美郷町では、獣害対策→資源利活用→ローカルビジネス→地域づくりのサイクル。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 捕獲体制は1班で、農家を主体に118名である。猟友会は84名で、主に冬季の狩猟である。(捕獲された個体は資源利活用の為処理場へ。67~68%が処理場へ。) <p>電柵などで農地をしっかりと守り農地の外に檻を仕掛けて捕獲する。</p> <p>(美郷町・農研機構(国立研究開発法人)・麻布大学教授の研究で、軽量で設置が簡単な電柵の部材を開発)</p> <p>⇒農家の駆除班は山に入って捕獲はしない。3月から10月までが捕獲期間だが、この時期の肉は脂身が少なく商品価値がなく埋没処理されていた。しかし、肉質を分析した結果高タンパク・低脂肪でヘルシーであることがわかり夏イノシシの商品価値が向上した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害対策を地域づくりに活かしていく <p>⇒山クジラ料理は「山くじらラーメン」「山くじら汁」「山くじらハンバーグ」「山くじらバーガー」「山くじらカレーパン」などがある。</p>	<p>* 庄原DMOの取り組みについて</p> <p>① 庄原ブランドの確立について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 観光産業の再生に向け、多様な関係者を巻き込み、特別な里山を訴求。 ・ 魅力づくりから販売促進へサービスを強化し、地域の稼ぎ出す力を引き出す。 <p>② マーケティング・マネジメント事業について</p> <p>○デジタル技術を活用し、観光事業者等の販売を促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまで開発してきた体験・ツアー商品をはじめ、庄原市内の旅行商品を一堂に集め、インターネットで見える化を図り、インターネットから予約・決済ができるWEBサイトを運営する。 ・ アンケート調査など観光実態調査についても、WEBサイトアンケートを活用するなどデジタル化やマニュアル化を進め、調査・集計・分析のスピードを早め関係者へフィードバックする。 ・ 会員等の業務サポートをはじめ課題解決及びビジネス創造のマッチングを提供し、事業連携を推進する。 ・ 庄原DMOの職員のスキルアップに向けてセミナーへの参加や業務をスキルアップするためのノウハウを学ぶ

ジビエだけでなく、肉やペットフード・家畜飼料・なめし皮・皮革製品など個体すべてを活用。

***青空クラフトの活動について**

⇒農家の女性は、守られた農地で収穫された野菜などを野菜市場で販売。その後の時間は、捕獲されたイノシシの皮を利活用して様々な商品を制作販売されている。

(ペンケース・キーホルダー・小銭入れ・名刺入れ・スマホケースなどなど)

まとめ

美郷町では電柵等で侵入を防ぎ、捕獲個体はジビエだけでなく有効に活用されている。

本市においては一部ジビエで活用されているがすべてではない。活用することも重要だが、まずは侵入を防ぐことが重要と考える。

③ 地域商社事業について

・地域が稼ぐPDCAサイクル

P：エリア戦略を決めて、地域で合意する。
(ターゲット・売りを明確に)

D：地域発の「新しい価値創造(商品開発)」を行う。

C：消費を上げる「稼ぐ受入環境」を整備する。

D：地域と消費者を「マッチング(流通・販路・PR)」する。

④ DMOの運営体制について

・商工観光課から職員を派遣+庄原市観光協会⇒庄原DMO(2020年4月設立)

まとめ

庄原市では、合併前の1市6町の観光協会が合併後統合されたが「西城町観光協会」は活発な活動をされていたこともあり、現在も残っている。庄原DMOとの関係も良好である。本市においては、美山町観光協会がDMOとなったが、各町に観光協会が残ったままである。本市においても観光協会が統合されるのが望ましいのでは。

◇ 行政視察報告書 ◇

〈提出者氏名〉 谷尻 宣雄

委員会名	産業建設常任委員会	
委員名	[委員長] 木戸 徳吉	[副委員長] 塩貝 孝之
	[委員] 村山 好明	[委員] 八木 信樹
	[委員] 小中 昭	[委員] 谷尻 宣雄
	[委員]	[委員]
視察先	島根県美郷町	広島県庄原市
視察日	令和4年8月17日(水)	令和4年8月18日(木)
視察時間	午後2時30分～午後4時00分	午前10時00分～午前11時30分
調査事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害被害対策の取り組みについて ・ 青空クラフトの活動について(現地視察) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 庄原DMOの取り組みについて
行政視察を終えて	<p>美郷町は島根県の中央に位置し、人口4,355人(令和2年国調)のまちです。面積は282.92km²でその大半が山林が占め、居住可能地はわずかである。平成16年10月邑智町と大和村の合併により美郷町が誕生したという。合併前の旧邑智(おおち)町では、本市同様に有害獣(イノシシや猿)による農産物の被害により、零細農家のやる気を奪うと警戒し、捕獲おりの設置補助などを進めてきた。そのような中、猟期明けの時期の捕獲頭数が多く、年々イノシシの駆除数が増加したことにより、駆除したイノシシを特産物とする「山くじら生産者組合」を設立し、評判の悪い夏場の猪肉を商品化し、猟友会との話し合いと理解を得る中、農家による駆除班を結成した。合併後においても「わが田畑を守りたいなら自ら動こう」とまちが農家を口説き、わな免許の取得、箱わなを普及させ、農家同士で助け合い、獣害駆除に地域ぐるみで取り組んでいるという。獣害を産業振興に結び付け、「獣害の先に、人づくり地域づくりがある。」と担当者は言われている。イノシシを「山くじら」と呼び、猪肉のジビエや革製品作りや企業との協定による商品化や大学との連携など産官学民が連携した取り組みを行っている。地元では農家や女性が参画し、革製品作りに取り組</p>	<p>庄原市は平成17年3月に1市6町が新設合併し、誕生したまちです。面積は1246.49km²で本市の約2倍はある広域なまちで、人口は32,956人(R4.7.31日現在)であります。DMO設立前は各観光協会が存在し、庄原市を本部とし、他の観光協会を支部として行政主導の観光振興が進められていた。しかし、行政指導ではマーケティングに基づくプロモーションがやりにくく、職員の定期異動により専門性やネットワークが育ちにくい、顧客志向になりにくいなど行政として限界があることから、行政と観光事業者等の中間支援機構として、令和2年度に庄原DMOを設立し、観光振興の役割を市と分担しながら、今日に至っている。観光協会の本部や支部を改組し、DMOを誕生されたが、西城町観光協会はこれまで活発な観光事業を展開されていたので、観光協会は存在するが、DMOの組織内に編入し、連携を図っているという。</p> <p>庄原DMOは、官民連携により、地域の稼げる力の仕組みづくりによって、地域経済を持続的に成長させることを目的としている。庄原DMOのミッションは稼ぐ観光地域づくりのかじ取り役としてマーケティングに基づく「魅力ある観光プロダクト」を開発・プロモ</p>

んでいる。視察当日も「青空クラフト」の現地視察を行い、なめし皮で作られたペンケースやキーホルダーなどが販売されていた。地元女性手作りによるこれまでの取り組みを紹介する「おおち山くじら物語」の紙芝居の初披露があり、地元女性のナレーターや猟師役などによる語りは、笑顔に満ちた語りで女性の方々の生き生きとした眼は、まさにこれまでの活動を誇らしげに語っているように感じながら、視察を終えた。

所感として、美郷町はこれまでの獣害を逆手に取り、地域振興や人づくりを念頭にし、進めてきたものであると考える。美郷町はイノシシが多く、本市のように鹿による獣害が少ないと言われていた。しかしながら、獣害で駆除したイノシシをただ処分するのではなく、特産品とする発想は見習わなければならないと感じたところである。担当者の熱意、企業や大学との連携、商品の販路開拓など様々な苦労があったと思う。まちづくりの一環としての町の担当課の設置や地域住民や関係団体の理解などにより、産官学民のマッチングによる成功事例といえるが、本市に取り入れるには、多くの課題があると考えます。しかし有害獣駆除からの様々な取り組みの展開は学ぶ点が多くあった。

ーションし、庄原ブランドの確立を行い、観光消費額（観光事業者等の販売額）を向上させ、地域経済を活性化するとともに、観光交流を切り口として、関係人口や定住人口の拡大につなげ、地域の持続的な発展に寄与することとされている。地域が稼ぐPDCAサイクルにより、基盤・持続・自走するための「人づくり、組織づくり」すなわち、地域資源の観光的価値を貨幣価値に変換することとしている。

所感として、庄原DMOは広域な範囲で、これまでの観光資源や特産物等を開発し観光事業を展開されている。設立後3年目を迎え、とりわけコロナ禍により、当初の目標の観光消費額を大きく下回っており、市からの運営費で賄っているが、今後、自主財源確保を目指し、取り組みを進めていくとのことであった。2名の市職員を出向させ、職員数も常勤で11名体制であると聞かされた。本市の観光振興と同じような目的で庄原DMOも運営されている。本市にも美山DMOがあるが、本市との違いは各町の観光協会があることである。今後、庄原市のように各観光協会が改組し、南丹DMOを設立し、各観光協会の事業を南丹DMOで展開していくことで南丹市全体の観光振興がより一層充実し、本市の活性化の一翼を担うのではないかと感じたところである。